

のびのびかぞく 28

堀直也さん

堀英恵さん

大地さん、日向さん

撮影 菅津かなえ

わがやは  
欲ばり。  
波にも乗りたい、  
子どもとも  
一緒にいたい。



朝は4時頃起きるという直也さん。メールチェック後、1時間ほど海を散歩し、7時には戻ってみんなで朝食。家での仕事のときは、昼食も家族そろってとります。夕食は6時。直也さんも英恵さんも、9時頃子どもたちと一緒に寝てしまうか、1時間くらいお茶を飲みながらおしゃべりをする……というのがこの頃の毎日。

取材日の早朝、薄曇りの天気になって電話をかけると、受話器の向こうで静かな波音、そして堀直也さんの快活な声が。

「大丈夫、きょうは晴れますよ。やりましょう！」

「エコサーファー」として、南伊豆を拠点に、子どもたちの自然教室やネイチャーガイドを行っている直也さんと、英恵さん、2歳の大地さんと8ヶ月の日向さん。このご家族を訪ねるのは、やっぱり晴れた日がいいなと思っていました。

直也さんの予報どおり、着く頃にはちょうどいい日差しが。本格的な夏を前に、弓ヶ浜には穏やかな波が寄せていました。

「ここは、ぼくがいちばん好きなビーチなんです」と直也さん。自宅からもほど近いこの海は、家族にとって、ほぼ毎日訪れる庭のような場所。

子どもと一緒にビーチクリーン。  
親子を越えて、仲間がひとり  
増えたようでうれしいですね。

英惠さんはサーフィンと出会って人生観が変わったと言います。「それまではブランドものもお化粧も好きだったんですが、だんだんいらなくなって。気に入ったものがちょっとだけあればいいんだと思うようになりました。「サーフィンってバランスなんですよ。小指の力の入れ方だけですごく変わる。でも、人間関係も発信の仕方、全部バランスですよ」と直也さん。



まずは、華麗な波乗りを見たい！という編集部のリクエストに、直也さんは「いいですよ！」と、ウェットスーツに着替えてボードを携え、海へ出てくれました。

この日は日向さんを抱っこして、大地さんと一緒に浜辺で見守る役でしたが、英惠さんも前日はサーフィンをたのしんだと言います。

「サーフィンをする友だちは、波に乗りたい気持ちをわかってくれているんですね。『子どもたちは見ているから、行っておいで』と言ってくれているんです」

大地さんも、直也さんを真似てサーフィンのポーズ。

「大地はかなり（とうちゃんっ子）ですね。自営業なので、生まれたときから一緒にいる時間が長かったです」と英惠さん。直也さんの不在時間が長いと、大地さんはさみしがってしまいます。

「ぼくは、毎朝かならず海に行つて、ビーチクリーンなんかもするんですね。大地が起きるときは一緒に行って、『とうちゃんはビーチクリーンをする。大地もよかったらやれば』と声をかける。そういうのって、

ぼくにとっては仲間がひとり増えたというか……親子という関係を越えて友だちのような感覚で、うれしいですよ」と直也さん。自然教室で子どもたちに伝えてきたことを、自分の子どもには、生活のなかで当たり前前に伝えることができる……それは大きなよろこびだと言います。

堀さんご家族が南伊豆に住むようになったのは、昨年7月。3・11をきっかけに、神奈川県藤沢市から移ってきました。ちょうど英惠さんのおなかには日向さんがいて、放射能の影響が不安だったこと、そして、

やはり同じように心配するひとが多かったのか、直也さんの仕事である子どもの自然教室がかなり減ってしまったことも背中を押しました。

「オンシーズンの5月くらいになっても、ほとんどゼロで。すごく考えさせられました」と、おふたり。

海外へ移ることも考えましたが、それぞれの両親など家族と離れたくないという気持ちから断念。ふたりに悩み、話し合いを重ねた末、以前から好きだった南伊豆への移住を決めました。

「いつかはもっと自然が多いところ



「ぼくは、どんな難しい話でも、子どもが理解できるように話すのが親の仕事だと思っています。絵本のよ  
うにね。逆に、子どもが理解できないことはやっちゃ  
いけないことだと思う。たとえば原発。なんのために  
やっているのか、よくわからないですよね」

竹沢純さん、竹沢八雲さん、  
小秋さん、菜さんご家族とは、  
親子それぞれの年齢も同じで、  
家族ぐるみのおつきあい。と  
きどき一緒にバーベキューを  
たのしむことも。竹沢さん夫  
妻は純さんのおじいさんの代  
から南伊豆で貸別荘を営んで  
いて、写真はそのテラス。夏  
は大忙しなので、嵐の前の休  
息。「ヴィラ弓ヶ浜」[http://  
www.yumigahama.com/](http://www.yumigahama.com/)



で暮らしたいと思っていたので、そ  
れが「へいつか」ではなく、いまでも  
いいんじゃないか、と考えたんで  
す」と英恵さん。  
この場所を選んだのは、直也さん  
の大学時代の同級生・竹沢純さんご  
家族がいたことが大きかったと言  
います。そのほか、やはり子どもがい  
て移住してきたひとたちとのゆるや  
かなつながりもあり、子育てはしや  
すいと英恵さん。  
「ママ友の人数は藤沢にいた頃と比

いか、と考えています。  
自然とともにある暮らしをしながら、  
皆がそれぞれ得意なことを持ち  
寄るかたちで仕事をし、雇用も産み、  
地域で電力をまかない、子育てもし  
やすい……そんな町にしていきたい  
と、熱く語る直也さん。  
「藤沢市の人口は約42万人で南伊豆  
町は約9500人。だから、もしぼ  
くが、『この町を環境都市にしてい  
こう!』という思いを伝えるために、

新しいステージはまだはじまった  
ばかり。日々の生活をたのしみなが  
ら、目指す先へ向かって、こつこつ  
と足場を固めているところなのだ  
とおふたりは言います。  
「うちはすごい欲張りだと思いま  
す。わたしは彼に『子どもと一緒に  
いる時間をもってほしい』と要求す  
るし、『サーフィンをしたい!』と  
も言うし……」と英恵さんが言う  
と、「ぼくは、欲ばりでいいと思ってい  
るんです」と直也さん。

べると少ないんですが、  
気の合う家族がいてくれ  
るし、つき合いが少なく  
なったぶん、ラクにもな  
りました」  
おふたりには、ここで  
これからやっていきたい  
ことがたくさんあります。  
「ここへ来て、正直少し  
はほっとしたんですが、  
その『ほっと』を求めて  
来たわけではなく、あく  
までポジティブな気持ち  
で来たんです」と言う直  
也さん。海があつて山が  
あつて川もある、自然豊  
かな南伊豆は、ドイツの  
フライブルグのような環

たとえば毎日10人に会えば、藤沢市  
だと140年かかるところを、ここ  
では3年で全員に会えるんですよ!」  
実際、直也さんは訪れる先々で出  
会うひとたちに軽やかに声をかけ、  
思いを共有できるひとを増やしてい  
るようです。  
「彼はよく口癖のように、『友だち  
みんな、こつこつへ来ればいいのに』  
と言うんです。どこかで困っている  
ひとがいたら呼べるような場所をつ  
くりたい、みんなが安心して暮らせ  
る環境を自分たちでつくりなげや、  
と思っているのかもしれない」と  
英恵さん。子育てがもう少し落ち着  
いたら、英恵さんも、好きだった「も  
のづくり」を再開したいと考えてい  
ます。



自宅は弓ヶ浜から徒歩5分の元民宿。向かいに広いお風呂があり、みんなで入ります。「彼と大地は1時間くらい入っています。この部屋でおっぱいをあげると、歌が聞こえてきたり(笑)」(英恵さん)

わがままでいたほうが、世の中の矛盾に気づける。だから、ずっと貪欲でいたい。

「みんな、一般的にはサラリーマンをやるでしょう？すると、お昼ごはんは子どもと食べられないですよ。ぼくは、3食子どもと一緒に食べたいし、いい波のときには波に乗りたい。だったらそれができる仕事に就かなきゃいけないし、家族にも、そういう自分であることを認めてもらう必要がある。そのなかで出てくる一つひとつの問題をクリアしていくのが、人間力だと思うんですね」

だから、貪欲に「わがままです」を追求していきたいのだと。  
「わがままでいたほうが世の中のいろいろな矛盾に気づけるし、わがままを通すには、その矛盾をなんとかする必要がある。でも、どこかの国では、ぼくのわがままが(当たり前)だったりもするから、そのあり方を持ってこれないかと考えたり…。友だちにも、『直也のところは好きなことだけやって、どうして食っていけるの?』と言われるんですが、やればどうにか食べていけるんですよ。」

もちろんぜいたくはできませんが(笑)。やりたいことを口にして、みんなにも協力を仰いでいく。それをずっと貫いていきたいですね」  
そう話す直也さん。夫婦でビジョンを共有できているのは、日頃のコミュニケーションゆえと言います。  
「テレビがないから、ふたりでよく話なんです。家で何がどこにあるかわからないおとうさんも多いけれど、ぼくは全部わかります」  
でも、「イクメン」と言われることには違和感があるとも。  
「イクメンということばに、『本当はイヤなのにちよつと手伝ってる』みたいなイメージがあって(笑)。そうじゃなくて、自然とこうなっ



インタビュー中、ひとりおもてへ出て、直也さんのウェットスーツをさわってみている大地さん。

いるだけなので…。」  
英恵さんは、日向さんが生まれて、ひとつ思い切りがついたと言います。「子どもが生まれたことでやりづらくなったことって、やっぱりたくさんあるんですね。サーフィンだったり、友だちとあそぶことだったり。でも、最近思うようになったのは、ずっとそうじゃないんだということ。

この子たちとこんなに一緒にいられるのは、ほんの一時。だったらそれをたのしみたいなと思えるようになりました。自分に言い聞かせている部分もあるかもしれませんが(笑)」  
「これからは女性の時代だと思うんです」と直也さん。

「別にいい夫を演じているわけではなくて(笑)、謙虚に素直にそう思うんです。やっぱり、おかあさんってすごいんですよ。マザーアースと言いますが、ぼくは自然の中でいろいろやっているからこそ、(母なる大地)のあつたかさを本当に感じるんです。だから、女性ありきで男性だということを理解しつつ、でも、もちろん男は男でやれることもやりたいこともあって、その両方をお互いがやっていく夫婦がいいですね」  
そんな自分たちであって、あとは5年、10年かけて、しっかり仕事が

まわるようになればOK!と。  
「そして、『どうしたらそんなふうにできるの?』と言うひとに、『わがやで少し暮らしたらわかるよ!』と言えるようになりたいですね」  
5年後の堀さんご家族に、みなさんどうぞご期待を!

ほり・なおや 子どもの頃から自然に親しみ、海洋学を学んでいた大学時代にサーフィンと出会う。卒業後就職するも疑問をもち、1年間アメリカへ。そこでビジョンを確立し、2001年にエコサーファーとして活動を開始。昨年は林業にも携わるなど、視野と活動の幅を広げている。http://www.eco-surf.com/

ほり・はなえ 美術大学を卒業後、ジュエリー関連の会社に就職。サーフィンを始めたことで興味の方向が変わり、サーフボードなどを扱うメーカーに転職。マーケティングやデザインに従事するなかで、直也さんと結婚。現在は育児に専念している。そのうち周囲の友人たちと創作するアトリエを構えてみたいと考えている。

ほり・だいち 2010年1月生まれ。おかしな仕草でみんなを笑わせてくれるひょうきんな一面も。お気に入りのおやつは小魚。近く保育園に通うようになるかも?

ほり・ひなた 2011年10月生まれ。何でもお口に入れてみたい時期。南伊豆の大きな環境で、ゆったり大きくなっている。

